



住民アンケート結果から考える「双葉地方復興ビジョン」

去る11月8日に福島市で双葉郡8町村の企画担当課長会議が開催され、会議の席上、福島大学災害復興研究所の協力により実施した「双葉8町村住民実態調査」の集計結果（速報値）が報告されました。

調査を担当した福島大学行政政策学類の丹波史紀准教授は、「避難生活が長期化すればするほど住民の帰還意識は弱くなる。住民の帰還意識を支えるためにも、行政は戻るためのビジョンを早急に示すべき」と指摘し、「住民の帰還に向けては、既存の自治体の枠を超えた双葉郡全体の取組みが重要」と広域的対応の必要性についても言及しました。この後の会議では、各町村の復興ビジョン・復興計画についての取組状況や除染のモデル事業についての情報交換を行いました。緊急時避難準備区域が解除された町村からは、「保護者懇談会の開催」や「業者委託による除染活動」といった帰還に向けた具体的な取組報告があった一方で、警戒区域の町からは「戻らない人への対応をどうするか」「戻れない場合のビジョンをどう描くか」といった厳しい意見も出されました。続いて、双葉地方の復興ビジョンについて意見交換を行い、「双葉郡内から人口を流出させない取組みが重要」「帰還後に向け広域市町村圏組合の維持を」「住める所に住む。そのためには圏域を取り払うべき」「セカンドシティの建設による段階的な帰還の検討」「放射線量だけが問題ではない。雇用や医療、商業施設など生活環境の整備が必要」といった意見が出されました。

今回のアンケート結果からも住民の多くが双葉地方全体の復興計画づくりを望んでいることが明らかとなり、企画課長会会長の秋本圭吾大熊町企画調整課長は「帰還に向けては各町村で異なる事情もあるが、施設の共同利用や新たな施設の整備など広域連携が欠かせないことから、今回のアンケート結果も踏まえ双葉郡全体で更に検討を重ねていきたい」とし、会議を終了しました。



お知らせ

—原子力被害の完全賠償を求め—

「双葉地方総決起大会」を開催します！

～双葉郡の復興なくして日本の再生なし～

多くの双葉郡民のみなさんへ、参加の呼びかけをお願いいたします

福島第一原子力発電所事故により県内外での避難生活を余儀なくされている双葉地方住民が結集し、ふるさとに帰還できる環境が整うまで安心して生活をおくれ、帰還後も安心して暮らせる賠償を求めるため、決議文の採択と国、東京電力に対する要求を行います。

皆様のご協力とご参加をお願いします。

日時 平成23年12月3日(土) 13時30分～

場所 いわき明星大学児玉記念講堂(いわき市中央台飯野5-5-1)

主催 双葉地方町村会・双葉地方町村議会議長会(広野町・楡葉町・富岡町・川内村・大熊町・双葉町・浪江町・葛尾村)

参加申込先 各町村役場(出張所)の双葉地方総決起大会担当係まで

大会に関するお問合せ先 双葉地方町村会事務局(電話 024-522-2456 FAX 024-522-2458)

地域の絆を深めた「パークゴルフ交流大会」

去る10月26日、二本松市日山パークゴルフ場において、東日本大震災により離ればなれになった浪江町近隣のパークゴルフ愛好者と避難先である二本松市のパークゴルフ愛好者の交流を目的とした「浪江町・二本松市〔絆づくり〕パークゴルフ交流大会」が開催されました。当日は横浜市、仙台市など二本松市以外に避難されている方々の参加も含めその数なんと156名という活気あふれる大会となり、参加された皆さんは、葉山・日山の2コース18ホールを和気あいあいとプレーし、福島県中華飲食業生活衛生同業組合の協力によるふるりの味「浪江焼きそば」に舌鼓を打つなど久しぶりに楽しい1日を過ごしました。参加者からは「慣れない土地での避難生活によるコミュニケーション不足や運動不足が解消できた」などと大好評で、仲間との久々の再会を喜び、二本松の方々ともプレーを通じて親交が増すなど、早くも次回の開催を願う声が多く聞かれました。

大会後、なみえパークゴルフ協会の長岡会長から「震災から7か月が過ぎ、やっと開催することが出来ました。天候にも恵まれて、久しぶりに顔を合わせた人も多く、あちこちで互いの近況を伝えあったり励ましあったりした姿が見られ、開催して本当によかったと思っています」とのメッセージが寄せられました。



三春秋まつり

～避難生活で生まれた絆～

小さな城下町・三春町の魅力を発信する「三春秋まつり」が11月5日、6日の両日、三春交流館まほら周辺で開催されました。今年は、三春町内に避難する葛尾村と富岡町の避難住民の元気づくりや避難受け入れ先である三春町住民との絆づくりも推進するため、三春町内の各種団体が組織する実行委員会が主催、葛尾村と富岡町が共催として参加しました。

開会式では三春町長とともに葛尾村長がテープカットを行い、5日は葛尾村のふるさとのおふくろフーズ製造の凍みもちなどの販売と葛尾そば石臼の会によるそば打ち体験が行われました。6日は元気な葛尾プロジェクトによる人形劇「葛尾大尽物語」が披露され、地域住民と避難住民が一緒に楽しみました。三春町の協力により開催したフォークデュオ「ダ・カーボ」のコンサートでは、豊かな情景が思い浮かぶ素朴で美しい歌声や暖かいハーモニーにハンカチで涙をぬぐっている方もたくさんいらっしゃいました。

双葉郡が一日でも早く元の姿に戻り、皆さんが一日でも早く帰れることを願っています。

(寄稿：葛尾村総務課 松本弘主幹兼企画係長)



石臼の会によるそば打ち体験



ダ・カーボ コンサート

「楢葉元気あっぷ教室」でリフレッシュ!!

楢葉町は、いわき市に避難している町民を対象とする健康づくり推進事業「楢葉元気あっぷ教室」の参加者を募集しています。同市に避難する楢葉町民が、11月には町人口の64%にあたる5千人を超える見込みであることから、避難生活の長期化で疲労が蓄積している町民に運動の機会を提供し心身のリフレッシュと健康増進を図ることをねらいとしています。教室は、1クラス60分の中でストレッチや様々な体操を組み合わせで行うなど、運動が苦手な方でも気軽に参加できる内容となっており、会場も仮設住宅だけでなく市内各地に避難した町民が参加しやすいように各地の集会所や体育館の利用を予定しています。

今後はイベント事業としてトライフィットネスや健康講話、なでしこジャパンの選手によるサッカー教室なども予定しており、担当の企画課 山内紀生主査は「健康づくりだけでなく、町民同士が顔を合わせる機会を提供することにより地域の絆づくりにも繋げたい」と意気込んでいます。



がんばる
ふたばの星

～大堀相馬焼の復興に向けて～

浪江町大堀地区に窯を構える大堀相馬焼は本県を代表する国指定の伝統的工芸品ですが、福島第一原発事故により陶匠は県内外への避難を余儀なくされました。

現在は、郡山市の福島県ハイテクプラザに仮事務所を置く大堀相馬焼協同組合。理事長の半谷秀辰さんは避難所や親戚宅を転々としながら避難生活を送り、最近ようやく郡山市内のアパートに落ち着いたそうです。『以前よりも10キロくらい体重が落ちてスマートになったよ』と笑顔を見せながらも、被災後の厳しい現状を話してくださいました。



大堀相馬焼協同組合
半谷秀辰理事長

『地震の影響で大堀の窯元では在庫の焼き物がほとんど壊れちまった。地元での仕事ができなくなって、生活再建の見通しも立たない有様だ。「陶芸の杜おおぼり」でも収蔵品の半分以上が壊れたが、大堀相馬焼が欲しいという注文もあるんで無傷のものを回収して細々と販売している。これまで高瀬川溪谷やなみえ焼きそばなどの地域資源と連携した大堀相馬焼の振興に取り組んできたけど、今回の原発事故ですべてが頓挫してしまった。とっても残念だ。』

そのような中、全国各地から激励や支援が寄せられたといいます。

『思いもよらぬことだったが、大堀相馬焼の流れをくむ益子焼の里から、益子町の町長さんが直々に見舞いに来てくれたし、高崎だるま組合や京都伝統産業組合からも義援金をいただいた。同じ伝統工芸に携わる仲間からの応援なので、本当に嬉しかったし、とても感謝している。』

今後の復興について、半谷理事長は表情を引き締めて語ります。『厳しい環境にあるけれど、これに負けてはいられねえ。震災後、大堀相馬焼復興の道を探ってきたが、多くの浪江町民が避難している二本松市の協力の下、中小企業基盤整備機構の支援を受けて二本松市内の小沢工業団地に仮設の窯を開設できる運びとなった。オープンは来年2月頃の予定で、ハイテクプラザの技術支援を受けながら特色のある釉薬の再現にも取りかかっている。正直に言って採算の見合う事業になるか不安もあるけど、なんとか伝統をつなげたい。やっぱり浪江町、相馬藩領にあってこそその大堀相馬焼だと思うんだが、当面は避難先で頑張りたい。苦しくとも楽しく前向きに取り組んでいく。』

いよいよ年明けから二本松の地で始動する大堀相馬焼の復興窯。その取組みにエールを贈るとともに、成功をお祈りします。

ふたば絆イリー☆役場奮闘中!! ~広野町~編

このコーナーでは、県の内外に避難を余儀なくされた各町村役場の現在の取組状況等をご紹介します。

第2回目は、9月30日に緊急時避難準備区域が解除され、平成24年末までの帰還を目標に除染・復旧作業が本格化している「広野町」です。役場総務課企画グループリーダーの中津弘文さんにご紹介いただきました。

「東北に春を告げる町」をキャッチコピーに町づくりを進めていた広野町は、3月11日に発生した東日本大震災により大きなダメージを受けました。特に沿岸地域の家屋・農地は津波により壊滅的な状態に陥り、さらに原子力災害が重なり、当町全域が「緊急時避難準備区域」の指定を受け、町民の殆どが町外での避難生活を余儀なくされました。

9月30日には避難区域の指定も解除され、現在は、平成24年末までの帰還を目指した復旧計画を策定し、徹底した除染作業をはじめとする環境整備に努めているところです。また、並行して町復興計画の策定にも着手し、12月末までには具体的な復興プランを取りまとめることとしています。

原子力災害には「放射能汚染」という厄介な問題が付きまとい、復興を果たす上での大きな障害になるものと考えていますが、もう後戻りすることはできません。震災前の生活基盤を早期に回復することに加え、“原発後遺症”をも払拭する大胆かつ斬新な復興策を打ち出し、魅力ある町としての再生を町民との協働のもと実現していく。そして、当町の復興は双葉地方全町村の復興にも寄与できるものでなければならないと考えています。「がんばろう 広野!! がんばろう 双葉地方!!」



“童謡の里”でもある広野町
～童謡「とんぼのめがね」歌碑～



広野町役場湯本支所

<アイガモのつぶやき>

福島大学による双葉8町村住民実態調査の結果が発表され、新聞各紙は、「帰還の意志について全体の26.9%、34歳以下では52.3%の人が戻らないという回答であった」とセンセーショナルに報じました。確かに、避難生活が長期化し多くの住民が双葉郡の将来に不安を感じていることは事実ですが、逆に言えばこの厳しい状況にもかかわらず、7割を超える人が帰還を望んでいることもまた事実ではないでしょうか。

そうした住民の方々が今何より望んでいるのは一日も早い除染作業のスタート。国による本格的除染作業は年明けからということですが、画期的な除染技術の開発が待たれるところです。

先頃、二本松市で開催された復興なみえ町十日市祭には県内外から多くの浪江町民が駆けつけました。「二本松市がさながら浪江町のように、本当に勇気づけられました」とは参加したある町民の弁。

除染はもちろん最優先ですが、“住民同士が心をつなげる”そんな時間が帰還に向けての大切なエネルギーになるのかもしれない。

